

研究課題	国際バカロレア初等教育プログラムにおける評価の実践についての研究 —児童の自己評価及び振り返りに注目して—				
氏名	有馬 実世	所属	教職大学院	職名	准教授
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること					
<b>【研究成果の概要】</b> （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 本研究の目的は、日本の一条校の国際バカロレア(International Baccalaureate: IB)初等教育プログラム(Primary Years Programme: PYP)認定校における評価の取り組みを記述し、児童の自己評価を促す評価のあり方について検討することである。 IB教育の特徴の一つとして、学習者の自己評価を促す評価のあり方が挙げられる。PYPでも重視される「学習のとしての評価(assessment as learning)」、「学習のための評価(assessment for learning)」の考え方は、石井(2026)等、近年の日本の評価研究においても注目されているものの、その具体的な実践事例の研究の蓄積は見られない。本研究では、PYPに取り組む教師の評価観及び評価実践を明らかにし、日本の一条校でのPYPのよりよい評価のあり方を考察するとともに、本学でのIB教員養成への示唆を得る。 本研究では2025年9月から2026年3月にかけて、日本の一条校のPYP認定校2校(A校、B校)で調査を行った。調査ではPYPコーディネーターや研究主任等、校内の評価実践を把握している教員を含む計6名に対し、半構造化インタビューを行った。インタビュー項目は、教師の評価観やIB教育に取り組み始めてからの評価のあり方の変化、学習者の自己評価を促す評価実践の詳細や注意点等である。 A校、B校の教師ともに、PYPの評価の特徴として「子どもたちが自分で自己評価をしている」(教師c)ことを挙げた。ところが、「自己評価」として用いられている中心的なツールが、2校では異なっていた。 A校では、PYPの探究の單元において、「自己評価」のために効果的に用いられているツールはルーブリックである。A校ではルーブリックを全学年で用いており、全ての探究の單元ではない学年もあるものの、児童と対話しながら作成する実践も全学年で行われている。教師bは、ルーブリックを対話しながら作成することで、「子どもたちがじゃあもっとうしよう、ああしようっていう具体的な目標が見えてくる」と話した。A校では、ルーブリックの内容に加え、ルーブリックを示したり児童と一緒に作成したりタイミングについて教員同士でも話し合い、単元の性質や児童の様子によってその方法を試行錯誤してきたという。 B校では、ルーブリックやチェックリストを作成する経験をもつ教員もいるものの、「自己評価」のために中心的に用いられているのは、児童が自身の探究のプロセスを記述するためのワークシートである。児童が記述するのは、「内容についての振り返り」(教師d)が多いという。教師eは、そうした記述等の「子どもの反応で計画を途中で見直したりとか、新しい活動を入れたりっていうことを大事にしている」と述べた。 A校では、児童と教師が協働して単元の目標を設定するためのツールとしてルーブリックが機能していると言える。B校のワークシートは児童の学習の自己調整のために用いられている可能性があるものの、教師の指導改善のためのツールとして機能している。B校に見られる教師の指導改善を中心とする「学習のための評価」はこれまでにも日本でも取り組まれてきたが、A校に見られる児童と目標を協働して設定することで自己評価を促す「学習としての評価」の実践は、教師が児童と協働しながら単元の設計に取り組むことを推奨しているPYPの特徴であると言える。 今後の課題として、「学習としての評価」の実践が行われている学校で学ぶ児童が、そうした評価活動にいかに関与しているのか検討していくことが挙げられる。また、本学のIB教員養成においても、学習者と教師が目標を協働しながら設定し、学習者の自己評価を促す具体的な方法について検討する機会を提供していく必要がある。					
<b>【研究成果発表方法】</b> 2026年度に調査を継続し、調査対象校を追加した上で、有馬実世「国際バカロレア初等教育プログラムにおける評価の実践についての一考察—児童の自己評価及び振り返りに注目して—」として『国際バカロレア教育研究』に投稿予定。					

※発表論文名(口頭発表を含む)、氏名、学会誌等名(投稿中・投稿予定・執筆中)を記入すること。

※本経費を用いて、報告書(冊子等)を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。